

古代日本語における複合動詞前項の接頭辞化

阿部裕 (名古屋大学大学院)

現代日本語には「トリ決める」「ウチ明ける」など前項が接頭辞である複合動詞が存在する。複合動詞において生じる文法変化のうち、後項の接尾辞化(補助動詞化)は文法化の例として注目されてきたが、前項の接頭辞化は殆ど取り上げられてこなかった。しかし接頭辞化は内容語から機能語への変化であり、文法化である。本発表では、前項の接頭辞化を文法化の視点から記述することにより、この変化を日本語文法史上の課題として位置づける。

動詞連用形接頭辞は現代語では生産性を有さないが、古代語では高い造語力を有していた。古代語の動詞連用形接頭辞には「トリ」「ウチ」「カキ」「サシ」等があるが、これらの後項となる動詞の種類や用例数は一様でない。かような差異が生じる理由は、接頭辞化プロセスの違いから説明できる可能性がある。そのため、個々の動詞連用形接頭辞についての検討を蓄積する必要がある。本発表では具体例として「トリ」を扱う。古代語の動詞連接「トリー」の様相を記述した先行論は存在するが、先行論でも文法変化としての接頭辞化プロセスは検討されていない。「トリ」の接頭辞化は上代に生じたと想定される。上代の「トリー」には「国にあらば父トリ見まし(父刀利美麻之)」(万葉集・巻 5・886)、「若草の妻はトリ付き(都麻波等里都吉)」(同・巻 20・4398)のように「トリ」が接頭辞となっている例が存在する。一方、「青淵に蛟竜トリ来む(蛟龍取将来)劍太刀もが」(同・巻 13・3833)のように2つの動詞の連続に過ぎない例や、「食す国の事トリ持ちて(許等登理毛知弓)」(同・巻 17・4008)のように前項と後項が一体化した複合動詞も存在する。動詞の連続に過ぎない「トリー」から、複合動詞の段階を経て、前項が接頭辞であるものが成立したと考えられる。本発表では「トリ持つ」がこの変化の契機になったと考える。「トリ」の接頭辞化は、動詞の連続に過ぎない「[トリ][持つ]」が再分析によって具体的な目的語を有する複合動詞「[トリ持つ]」に変化し、その「トリ持つ」がメタファーによって抽象的な目的語をとるようになった結果、前項「トリ」が手にする意を表さない接頭辞的要素として再分析され、さらに類推によって他の動詞に付されるようになったと推測される。

以上、複合動詞前項の接頭辞化は文法化の一事例と位置づけられる。接頭辞化についてのかような個別的検討は、日本語複合動詞史を構築する上でも重要である。